



ちょっとそこまで～お散歩日和(地域編)～



農の風景公園

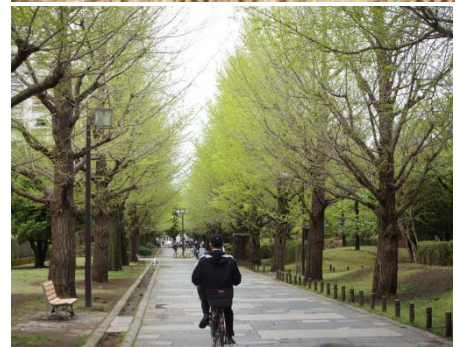


どこかに美しい村はないか
一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒(くろビール)
鍬(くわ)を立てかけ 籠(かご)を置き
男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか
食べられる実をつけた街路樹が
どこまでも続き すみれいろした夕暮は
若者のやさしいさざめきで満ち満ちる

どこかに美しい人と人との力はないか
同じ時代をともに生きる
したしさとおかしさとそうして怒りが
鋭い力となって たちあられる

(茨木のり子「六月」より)



豊かで美しい情景を思い浮かべつつ、同時代をともにする人と人との絆の大切さを強く心に訴えてきます。未来への力を感じる素敵なお詩です。しかし、それがなぜ「六月」なのかは、今一つよく分かりません。

近隣を散歩していたときのことで、高松地区の「農の風景公園」で意外な植物に出会いました。大麦畑です。二毛作が盛んに行われていた時代には珍しくもなかった植物ですが、今では「麦秋」という季語も死語に近いのではないのでしょうか。聞けば、練馬の地は国産初のビール麦種「金子ゴールド」発祥の地なので、JA東京あおぼが、ご当地ビール復活を推進し積極的に大麦栽培を進めているのだそうです。穂が黄金色に色付き始めていますから、収穫時はもう間もなくでしょう。

そして、「食べられる実をつけた街路樹」と言えば、真っ先に思い浮かぶのが銀杏です。さすがに「六月」との関連は希薄ですが、それでも、この詩にあるような「美しい村」とは、わが「いちよう通り団地」のことだろうと一人合点している次第です。

そう言えば、光が丘清掃工場横の銀杏並木を散策していましたが、銀杏の木々の根元に、たくさんの実生の苗が繁茂していました。拾い忘れた銀杏から芽吹いたのですが、こうして必死に命の炎を燃やしている姿を見ると応援したくなります。

この銀杏ですが、意外にも絶滅危惧種なのだそうです。恐竜の時代に大繁殖したけれど、その後の気候変動などでほぼ絶滅。今はもはや自生することはなく、挿し木など、人の手で守られて細々と生き続けているに過ぎないのだとか。そう思うと、愛おしさもさらに募るでしょうか。



蛇足ながら、本当かどうか知りませんが、銀杏の形状によって雌雄の判別が付くという話を聞いたことがあります。写真の右が雄で、左が雌です。面の数の違いで見分けるのだそうですが、余り左の形状の銀杏を見たことがありません。毎年、今

年こそは注目してみようと思うのですが、その頃になると面倒臭さに心が負けてしまいます。

さて、太陽が眩しい季節になってきました。以前、酒の肴に「もしも人間の皮膚が緑色をし、光合成ができるようになったらどうなるか。」という居酒屋談義をしたことがあります。当初は「え〜っ!」と悲鳴があがりますが、次のような説明を始めると、徐々に変化が表れてきます。

光合成によって自らの基本エネルギーを生成できるのですから、食事をしなくても良いことになります。ただ1日に1回くらいは窒素、リン酸、カリウムなどを含む液体肥料のようなものを飲む必要はあるでしょう。しかし、食事を作ったり食べたりする時間や費用が浮き、そのため、生活に余裕ができるはずですよ。

また、今のように他の生物（野菜や家畜など）を殺して食べることをしなくなりますから、食料問題が原因となる戦争や他人との争いがなくなり、人間は精神的にも安定を保ち、性格が今より温和なものになるでしょう。さらに、土地が余り、値段も下がりますから、一生かかってマイホームを手に入れるような苦労もなくなります。その他、風呂に入る習慣は残るでしょうが、トイレは不用になるかもしれません……。

ここまでくると、話の輪に加わっていた人たちの反応も俄然変わってきます。しかし、そんなに良いこと尽くめではない一面にも触れておくべきです。

例えば、まず皮膚を光に当てて光合成をしなければ生活することができないのですから、服を着なくなります。着るとしても透明が好まれるので、ファッションはがらりと変わってくるに違いありません。学校や会社では、今よりもはるかに明るい照明を使うようになり、その中で裸に近い格好で行動するか、または1日に何時間か強い太陽灯を体に照射するための、特別な部屋が用意されることになります。個人の家も、屋根や壁が透明に近くなるはずですから、プライバシーを守るのに苦勞をしましょう。

それよりももっと問題なことがあります。生きていくには太陽の光に当たっていれば良いということになれば、当然ながら人類は長い間には次第に植物のように、体を動かさない方向に進化？していくはずですよ。



おや? この設定は、手塚治虫の「火の鳥」(宇宙編)で読んだような気がします。

(終)